

幼年期の言語教育

——満二歳児の対話文を中心に——

野 地 潤 家

一
本稿では、一幼児の満二歳期（とくにそのうちの一月間）

における話しことばの生活を手がかりとして、幼年期言語教育の基本的な問題について考えていきたい。

ここで対象にする一幼児は、わたくしの長男（澄晴）で、昭和二十三年三月九日生れ。出生地は愛媛県温泉郡小野村（農村）であったが、生後二カ月目からは、広島市基町北区（戦後の一般住宅街）で成育した。用例は、昭和二十五年二月九日（木）から三月八日（水）までの二十八日間に採集された六三五例のうちから、とりあげることにする。

なお、家には、両親のほか、この時期としては、昭和二十五年一月十六日に生れた弟（照樹）がひとりいる。

二

満一歳十一カ月から満二歳になろうとする一カ月間の長男のことばの生活を、対話の観点から類別すると、つぎの五類になる。

第一類 対話の起文が本人によっておこされるもの。起文の対人形式が「↓父・母・隣人・友だちなど」となるもの。自発型とよびうるもの。

たとえば、

○アレ チョーダイ。（↓父）

昭和25年2月9日（木）、朝、歯ブラシをほしがって、この女のように父に言う。

のように、本人が自発的に父に向かって、歯ブラシ（アレ）をとってほしいと話しかけているもの。

第二類 対話の起文は、父・母・隣人などによっておこされ、本人はそれに触発されて、その一部を、あるいは全文を

模倣していくもの。起文の対人形式が「父・母・隣人など↓」となり、つづく次文の対人形式が「↓父・母・隣人など」となるもの。触発型（模倣型）とよびうるもの。

たとえば、

○ヨイシヨ。1（父↓）

○ヨイチヨ。2（↓父）

昭和25年2月15日（水）、午前八・三〇すぎ。父がものをまたぐ時に1の文のように言うのを、すぐさまねて、2の文のように父に言う。「チヨ」は、やっと「シヨ」と言えたり、言えずに、「チヨ」と言ったりしている。

のような型である。これには、自然触発・有意触発、都分模倣・全体模倣がある。

第三類 対話の起文は、本人によっておこされるばあいもあり、父・母・隣人などによっておこされるばあいもある。次文以下が一定の緊張関係（時に断続をみることもある）をもつて展開していくもの。起文の対人形式は「↓父・母・隣人など」・「父・母・隣人など↓」となり、つづいての展開がはかられる。問答型・対話型とよびうるもの。

たとえば、

○トーチャンワンワン ナイナイチョーダイ。1（↓父）

○ドコエ？2（父↓）

○アッチ。3（↓父）

○ワンワン オッバイ チョーダイ。4 (↓父)

昭和25年2月16日(水)、午前九・〇〇すぎ。おもちゃの犬(ワンワン)をしまつてくれ(ナイナイチヨードイ)と、1の文のように父に言う。父が2の文のようにきくと、3の文のように言う。ついで、ワンワンにおちをちょうだいと、4の文のように父に言う。

のようなもの。

なお、この類は、さらにこまかく分化していく。

第四類 対話の起文は、多くのばあい本人によっておこされるが、相手に父・母・隣人などがならない。そういう対人性にとほしく、ひとりごとふうになったり、物(生物・家具・おもちゃ)などに向かつて話しかけるもの。起文の対向形式は、多くのばあい「↓巴(本人)・物(生物・家具・おもちゃなど)」のようになる。独語型ともよびうるもの。

たとえば、

○タッポ コッチ オイデ。(↓巴)

昭和25年2月16日(木)、夕食の時、食卓の向こうのほうにあるコップ(タッポ)を、こちらのほうへとろうとして、この文のように言う。

のようなものをさす。

第五類 対話の起文は、父・母・隣人など本人以外の者によっておこされ、本人の応対が次文において話しことばとなっ

てあらわれないばあいである。起文の対人形式は、「父・母・隣人など↓」となり、それにつづく次文は「↑……………」↓父・母・隣人など」となって、無言となる。無言型ともよびうるもの。

たとえば、

○コレワ ナンデスカ?1(父↓)

○……………。2(↓父)

昭和25年3月3日(金)、午後二・〇〇すぎ。父がたばこを吸っていて、1の文のようにきくと、なにか言いたそうにして、なにも言えない。のようなものをさす。

三

第一類には、

○モー アンガ。(↓父)

昭和25年2月9日(木)、朝、窓の障子の棧に、小さい蛾(モー)がいる(アンガ)のを見て、このように父に言う。

○ターチャン アッタイ パンツ チョーダイヤ。(↓母)

昭和25年2月9日(木)、朝、母(ターチャン)に向かつて、あたたかい(アッタイ)パンツをはかせとくれと、このように言う。

のように、幼児らしい情報や要求を示すものが多い。語いも、幼児特有のものをを用いる。「ターチャン」は、「カーチャ

ン」と言えないで、このように言っているのである。

○クライネ。(↓父)

昭和25年2月15日(水)、午後八・〇〇ころ。父にだかれて、キャラメルを買いに行く時、玄関を出たとたんに、すぐにこのように言う。今まで父がよく言っていたことばである。

この例では、みずから力行音が言えるようになって、日ごろのようなばあいに父からきかされていたことばが自発的に出てきたものとみられる。触発型からはなれて、自発型になってきた一つの具体例である。

また、

○タータ チョーダイ。1 テンキ ヨ。2 (↓母)

昭和25年2月16日(木)、午前一一・三〇すぎ。台所へ行って、母に下駄(タータ)を出してくれと、1の文のように言う。天気(テンキ)がよく、隣近所の女兒たちが戸外で遊んでいるのを見て、2の文のように言う。

のように、要求と報知(要求の理由づけ)とがしげんに一つのいきおいをなして、文の質量の充実・増大へと伸びている例もみられる。

さらに、

○トーチヤン オチョイ イッタ。(↓父)

昭和25年2月18日(土)午後八・〇〇すぎ。父が帰

宅すると、玄関まで出てきて、すぐに父に向かって、このように言う。父の帰宅のおそい(オチョイ)ことを、母に言ったのである。

○バーチヤンガ オモチツタ ヨ。(↓父)

昭和25年2月18日(土)、午後八・〇〇すぎ。父が帰宅すると、平井の祖母(バーチヤン)がおもちを送ってくれた(オモチツタ)ことをこのように報告する。

○パイ パイヨ。(↓父)

昭和25年2月18日(土)午後八・〇〇すぎ。父のへやに、みかんがっぱい(パイパイ)パケツに入れておいてあるのを見て、それを指さしてこのように言う。

以上三例は、帰宅した父に、帰りのおそかった父を待ちわびていたさま、父の不在中のニュースをつぎつぎに自発的に話しかけたものである。新しい経験や事件を、自分のことばいっばいに表現していこうとするさまがうかがわれる。

○チンダ?1 マダ?2 (↓父)

昭和25年2月20日(月)、午前九・〇〇ころ。父の机に来て、インクの使用がすんだ(チンダ)か、まだかを、1・2の文のようにきく。

これは、自発的に問いの形をとって、それが単純でありながら、要をえた形に定着している。

○ア・イチヤン オッバイ チョーダイ イッコ。(↓母)
昭和25年2月20日(月)、午後三・〇〇すぎ。母とおふろにいらって、家に残してきた赤ちゃん(ア・イチヤン)(弟、照樹)のことを心配して、おうち(オッパイ)をほしがって、言ってるよ(イッコ)と、この文のように言う。「イッコ」は、あいまいに言っ、はっきりとほききとれなす。

この例は、自分の弟(赤ちゃん)について、みずから述べたもので、いつともは赤ちゃんをつれてくるのに、きょうはおうてきたという新しい経験から、この言いかたを得ているのである。

○トーチヤン ガ トーッタ。(↓母)

昭和25年3月4日(土)、午前八・〇〇。父が、母と自分(澄晴)とのうしろを通って、食卓につくと、すぐに母に向かって、このように言う。

平凡なことが新鮮な気持でとらえられ、それがいきいきと母に報告されている。格助詞「ガ」の安定性のある発現も注目される。

この例につづいては、

○ワイタ ヨ オユガ。1 ターチヤン オユ ワイタ

ヨ。2 (↓母)

昭和25年3月5日(日)、午後五・〇〇前。母におんぶして、赤ちゃん(弟、照樹)を入れるお湯がわいたので、母(ターチヤン)に、1・2の文のよう

に言う。

のように、主・述の倒置法がみられ、この例につづいて、倒置法が三例も続出している。

この期のことばの教育としては、まず自発型の幼児らしさにみちた文表現に着目していくべきである。この類では、ことば(文表現)の習得に應じて、安定化がみられる。同時に、幼児としての新領域の開拓も、いくらかの不安定感をともないながらおこなわれていく。

両親としては、幼児の自発的な表現を、たしかに受けとめてやるのがだいじである。その時その場の大人としての仕事に追われて平板な「あいらす」にながれないようにいましめなくてはならない。単純無量の幼児の気持をせいっぱいに汲みあげなくてはならない。幼児の対話を育てていく基本がここにある。(前掲諸例に、父・母の応対の文が欠如しているのは、多くは記録の不備によるものである。)

四

第二類には、

○ホントニ ホントニ。1 (父↓)

○ホント ホント。2 (↓父)

昭和25年2月14日(火)、父が意図的に、「ホントニ」の「ニ」をきわだてて言っても、2の文のように言うだけで、まだそれをまねようとはしない。

のように、幼児の発達段階に應じての模倣がみられる。

また、模倣部位は、

○ホーラ ケムイ ヨ。1 (父↓)

○ホーラ。2 (↓父)

昭和25年2月15日(水)、朝、父が1の文のように言うのと、すぐにまねて2の文のように言う。

のように、幼児の耳にとめた興味によってえらばれていく。

また、これらの自然触発に対して、

○オハヨー イーナサイ。1 (母↓)

○オハヨ。2 (↓浜本のおばさん)

昭和25年2月16日(木)、午前一〇・三〇ころ。お隣の浜本のおばさんに、朝のあいさつをするように

と、母が1の文のように言うのと、すぐに2の文のようにおばさんに言う。

○オカーチヤンニ オーバオ キセテ モライナサイ。

1 (父↓)

○オーバ チョーグイ。2 (↓母)

昭和25年2月16日(木)、午前一〇・三〇すぎ。父と横川(広島市内)へ出かける時、父が1の文のように言うのと、母のところに行つて、2の文のように言う。

のように、父・母による有意触発もみられる。この有意触発では、

○オカーチヤン ヒバチ モツテ キタ ヨ イーナサイ。

1 (父↓)

○ビバチノアツタ ヨ。2 (↓母)

昭和25年2月17日(金)、午前七・三〇すぎ。父が火鉢のことを1の文のように言うのと、母に向かって、2の文のように言う。

のように、起文の焦点・要点をとらえて、自己の言語能力に応じて、その場面の中で、自己のこぼれを生かしていく。触発に際して、「ヒバチ」のような語の出現をみることもすくなくない。

模倣単位は、たとえば、

○オミカン。1 (父↓母)

○オミカン。2 (↓父)

昭和25年2月22日(水)、午後八・〇〇すぎ。父が母に1の文のように言うのと、すぐにまねて、2の文のように父に言う。

○ミルク モー ハンプン シカ ナイガネ。1 (母↓巴)

(母のひとりごと)

○ハンプン。2 (↓母)

昭和25年2月23日(木)、午前八・〇〇すぎ。母がひとりごとのように1の文を言うのをきいて、まねて2の文のように言う。

のように、全体模倣の四音節名詞(一語文)もあり、部分模倣のそれもある。模倣単位のとりにかたは、触発の興味に際して、かなり自在におこなわれる。

触発型(模倣型)の文表現は、幼児の言語習得の基本にな

っている。触発者としての両親は、自然・有意両触発を通して、ゆたかな正しい文表現を用意しなくてはならない。触発の機会を自然にゆたかにして、語彙・文の習得をかつぱつにしてやるのがのぞましい。自然触発の中で直接全体模倣のばあいは、幼児の模倣ぶりにのみ興味を向けて、興味本位の「あしらす」におわりやすい。この点は、じゅうぶんいしまめなくてはならない。

五

第一類・第二類の対話は、それぞれ自発・触発に重点をおいた単純対話であって、対話における展開性は、その可能性をはらんでいたが、展開はおおむね単一であった。

第三類の対話型・問答型は、第一・二類を基盤にしたそれぞれの展開を示すものとして考えられる。

たとえば、

○アッタイ パンツ ハキナサイ。1 (母↓)

○アッタイ ナイ ヨ。2 (↓母)

昭和25年2月14日(火)、母に1の文のように言われて、パンツをはくと、つめたいので、すぐに2の文のように母に言う。

のように、「アッタイ」の単純模倣でなくて、否定法をとっての言いかえしになっている点は、第二類からの発展とみられる。

また、

○トーチャン ワンワン ナイナイ チョーダイ。1 (↓父)

○ドコエゾ? 2 (父↓)

○アッチ。3 (↓父)

○ワンワン オッパイ チョーダイ。4 (↓父)

昭和25年2月15日(水)、午前九・〇〇すぎ。(前

掲参照)

のように、第一類の自発型(「チョーダイ」形式・指示方法など)をふまえて、素朴な対話をなしているものもある。

○アカチヤンノ オック ナイカネ? 1 (母↓)

○オック アル ヨ。2 (↓母)

昭和25年2月15日(水)、赤ちゃん(弟、照樹)につけるメンソレタム(オック)(おくすり)を、母がさがして、1の文のように言う、2の文のように言う。

これは、単純な問答になっている例である。「オック」と母が言っているのは、幼児へ問いかける母親のごくしぜんな心くばりである。

○ババチイ ヨ。1 (母↓)

○ババチ? 2 アーチヤン ポンボン? 3 (↓母)

昭和25年2月16日(木)、戸外で小石を拾うので、母がきたないよ(ババチイヨ)と、1の文のように注意すると、きたない(ババチ)う、赤ちゃん(アーチャン)のうんこ(ボンボン)なの?、と 2・3

の文のように母にきく。

のように、母の問いに対して、さらに問いをかさねていくようにもなる。

○シミハレチャナン オカズワ ナンニ スルカネ?

1(母↓)

○オカズ チョーダイ。2(↓母)

昭和25年2月18日(土)、朝、母が1の文のようにきくと、2の文のように言う。

この例では、「オカズ」という語にひかれて、それはうまく言えたが、母の問いの文意——とくに、「ナンニスル?」はわからなかったことを示している。この問答のすれは、母の一種の不用意な言いかたにも起因し、幼児の理解力の限界にも起因している。

○シミ ヨ。1(父↓)

○チヨ一 ネ。(↓父)

昭和25年3月4日(土)、父がすずりのすみをすって、1の文のようにおしえてやると、そうね(チヨ一ネ)と、2の文のように父に言う。

この例では、触発型でない、問答型としての幼児らしい答えぶりを見ることができ。

○トートーオバチャン ジドーシャ ヨ。1(母↓)

○トートーオバチャン チンチンプー ヨ。2(↓母)

昭和25年2月22日(水)、午前九・〇〇すぎ。お隣の浜本のおばさん(このおばさんのことを、澄晴は、

トートーオバチャンとよびなれている。)が自動車にのって行くのだと、1の文のように母が言うのと、電車(チンチンプー)に乗って行くのだと、2の文のうに母に言う。

この例には、自然触発を一步ふみこえた対等の言いぶりが見られる。

○コッチ ヨ。(↓父)

昭和25年2月22日(水)、午前一一・〇〇。父と外出する前に、くつは、玄関ではなく、台所のほうにあると、父が言うのに(話しことばのままを記録してはいない。)、玄関のほう(コッチ)にあると言うこの例にも、幼児としての自己主張があって、緊張した対話性がみられる。

○ターチャン プンプ バイ ヨ。1(↓母)

○トートーオバチャン プンプ ヨ。2(母↓)

○トートーオバチャン ノリヨ。(↓母)

○オバチャン プンプ バイタ ヨ。4(↓浜本のおばさん)

昭和25年2月23日(木)、午前一〇・〇〇。母(ターチャン)に、バケツの水がいっぱいになっているよと、1の文のように言う。母が、そのバケツの水は、お隣の浜本のおばさん(トートーオバチャン)のだと、2の文のように言うと、3の文のように母にたしかめて、お隣のおばさんに4の文のように

しらせる。

この例には、複合対人形式における報知・確認・報知のひとつづきの展開がみられる。

○カエッタ? 1 (↓母)

○トーチャン ワ? 2 (↓母)

○トーチャンワ ボチャボチャ イッタ ヨ。 3 (母↓)

○ヒトリ イッタ? 4 トーチャン ボチャボチャ? 5 (↓母)

昭和25年3月3日(金)、午後三・〇〇すぎ。来訪していたお兄ちゃん(学生)が辞去したかと、1の文のように母にきき、ついで、2の文のように父のこをきく。母が3の文のように、父はおふる(ボチャボチャ)にいったと言うと、4の文のようにきき、また、5の文のようにきく。

この例には、四つの問いの展開がみられる。自分の知りたしめたいことを、簡単な形ではあるが、問いつづけていつている。

このように、この期には、対話型・問答型の発展がみられる。ことに、この一カ月間では、二月二十二日(水)に、この第三類の例がいちじるしく、この日の採集例53のうち、18例をかぞえることができる。

○ダレニ モラッタ ノ? 1 (父↓)

○アッチノ オバチャン ネ。 2 (母↓)

○アッチ オバチャン。 3 (↓父)

昭和25年2月22日(水)、午前一〇・〇〇すぎ。母と外出し、丸山さん(近所のかた)にりんごをもらったので、父が1の文のようにきくと、母が2の文のように言っただけ、それをまねて、3の文のように言う。

この例では、母の2の文に助けられて、父の問いにこたえている。2の文は、母が代って答えているが、単にそれだけでなくて、2・3の文により、母子一体の答えかたになっている。発達途上の幼児のことばの教育がこのような形でいとなまれることは、ごくせんなことであるが、それだけに、このような方法を重視していかなくてはならない。

対話型・問答型の教育は、幼児のことばの教育のなかでは、最も中心の位置をしめる。

両親は幼児との対話の展開において、話し手としての幼児をいたわってやり、ひきたてていかになくてはならない。また、両親は幼児に対してよき聞き手でなくてはならない。ともすると、両親はかんたんにあしらってすませる「あしらひ」におちいりやすい。両親が幼児に対して興味本位の「あしらひ」におわらないようにするには、両親としてのことば自覚を深めていなくてはならない。

六

第四類には、

○ベッコ アルノ? 1 アン ノ? 2 (↓己)

昭和25年2月22日(水)、午前一〇・三〇ころ。オ
ーバのポケット(ベッコ)があるのかと、ポケット
をさがしながら、1・2の文をひとりごとのように
言う。

○コッコ。1(にわとり↓)

○トート。2(3(↓))

昭和25年2月22日(水)、午前一一・〇〇すぎ。父
と交通展へいく途中、にわとりの鳴く(1の文)の
をまねて、2・3の文のように言う。

○モー チョイ チョイ。(↓はえ)

昭和25年2月23日(木)、午後一・〇〇すぎ。しっ
こをしに外に出ると、はえ(モー)が一匹いたので、
それを追っばらおうとして、このように言う。

のように、広狭二様のひとりごとふうの話しぶりがみられ
る。はじめの例は、狭くかぎったばあいのひとりごとにか
く、あとの二例は、にわとりの鳴きごえに触発されたり、は
え(モー)に自発的に話しかけたりして、いずれも広く
みたばあいのひとりごとにかかひ。あとの二例は、それぞれ
触発型・自発型の対話ともみられるが、対人性(父・母・隣
人など)をもたず、幼児らしい対向性(生物・家具・おもち
やなど)・無心性をもっている点で、第一・二類とは別にま
とめて考えていくことにした。

この時期としては、こうした独語型がかなり多い。

○オウドン ヒイタ ヒエタ ヒイタ。(↓)

昭和25年3月2日(木)、二・三〇ころ。おうどん
をたべかけのまま、父のへやに来ていて、すこしす
ると、また、このように言って、走って行って、た
べる。「ヒイタ」(冷えた)は、「イ」と言ってい
るうちに、「エ」にもきこえる時がある。
この例には、幼児みずからのこのような形でしかあらわす
ことのできない伸びやかさがみられる。

○ヤ、メ、タ。(↓)

昭和25年3月6日(月)、午前九・〇〇すぎ。ミシ
ンのふみ板を動かして、車をまわして遊んでいて、
しばらくしてから、このように音節ごとに区切るよ
うに言う。

ひとりでこのような言いかたをするまでには、

○ヤメタ。1ヤメタ ヨ。2(↓母)

昭和25年3月9日(月)、朝、ラジオ(N・H・K
)の「うたのおばさん」が歌をうたいおわること
に、1・2の文のように母に言う。

このような自発型の言いかたをへているのであった。「ヤ
、メ、タ。」の例には、あそびをやめる時のほっとしたひと
りごとらしさがにじんでいる。

○トンヨ。(↓)

昭和25年3月7日(火)、朝食の時、食卓にところ

として、ちょっとまずくと、すぐにこのように言う。

この例にみられる機敏な反射性の表現にも、よくひとりごとが生きている。

○パカ パカ。 (↓己)

昭和25年3月7日(火)、午前八・〇〇すぎ。自分でお馬さんになって、へやの中をこのように言って、歩きまわっている。

この例は、あそびに夢中になっている時にみるひとりごとである。

○ヒライタ。1 ヒライタ。2 ナンノヒライタ。3 (↓己)

昭和25年3月7日(火)、午後七・三〇ころ。ひとりでのうたうたっている。「ナンノ」のつぎの「ハナガ」(花が)がぬけてしまう。

このように、この類では、うたになったり、また時として、かけごえになったりするばあいもある。

この類の独語型は、幼児みずからのひとりあそびともにかっばつになる。そこには、両親のはいるゆとりはのこされていぬ。ただ、その独語をききとめてやることはだいいじであり、そのたのしみをみまもってやることだいいじである。さらに、こどものあそびそのものをゆたかにしてやることを忘れてはならぬ。

なお、広義の独語のばあい、両親の話しかけてやるゆとり

はのこされている。

七

第五類の例は、あまり採集されていない。前掲のほか、またまづぎの二例がみられる。

○サヨナラ。1 (浜本のおばさん↓)

○……。2 (↓浜本のおばさん)

昭和25年2月21日(火)、午後六・〇〇ころ。お隣の浜本さんかたへ、ひとりで遊びにいっている。暗くなるからと思つて、母がつれにいっても、帰らないと言つて、なかなかきかない。それでも、やっと帰るようになって、ぼつぼつとスケートをおして、チャンチャンコの左の前を口でかみ、とても悲しそうにして帰る。お隣の浜本のおばさんが1の文のように言つても、何と言つても、知らん顔をして、ぶりむきもせず、しよほしよほ帰る。

○ケサワ タピオ ハカズニ イルト ツメタイ。1 (母 ↓己) (母のひとりごと)

○……。2 (↓母)

昭和25年2月22日(水)、午前八・〇〇ころ。朝食の時、母がひとりごとのように1の文を言うとき、すぐに自己のおでんちをぬぎ、もう一つ、えもんかけにかけてあるおでんちを持ってきて、母の背中にのせる。記録に、この時、涙が出そうと書いている。

前の例は、ふきげんになって、だまりこんでいるばあい

あり、あとの例は、だまってはいるが積極的に行動してはいる
ばあいである。

この類の無言型においても、両親としてはそのしぐさ・感情の動きをみまもってやるのがだいじである。幼児らしい行動・感情は、この無言型において深くあらわれることもすくなくない。

八

幼児の言語教育においては、その発達段階に即して、ゆたかな対話力の育成をはからなくてはならない。それには、幼児の対話を幼児本位に愛護していくことが基本になる。対話愛護は、対話の分化に應じて、それぞれ考えられなくてはならない。

とくに満二歳期のこの時期においては、幼児における対話の自発性・触発性・展開性・独語性に注目し、それぞれの発達成立とその過程において、両親が理解者・触発者・表現者・育成者としての立場と態度と方法を考えていくようにしなくてはならない。

両親の基本的立場としては、こども本位・対話本位の立場をとり、基本的態度としては、「あしらい」をいましめて、幼児対話を正しく理解していく態度をとり、基本的方法としては、対話各類の特性に應じて、理解者・触発者・表現者・育成者としての対幼児話法をこまやかにしていくことがのぞましい。

(昭和31年4月25日稿)

(広島大学助教授)